



總のしりかへ

岩野泡鳴

K



戀のしやりかうべ

岩野泡鳴



近代詩歌叢書
第三編

戀のしやりかうべ

近代詩歌叢書刊行の趣旨

ポトトレエル、ベルレエヌ等天才の作品を出版せる「カ
ンタベリーポエツ」の故知にならひ吾が詩歌壇に中心的
視界を作れる第一流作家の最近傑作を集め出版して、詩
歌壇の黄金時代を紀念し、且つ遺芳を萬世に傳達せしめ
んとすること之れ本叢書の主目的なり、而して一時擴大
されたる詩歌の分野も、責任ある良書と定價至廉の美本
なきため、漸次限定せられんとする傾向明かになれり、
之れ吾が高貴なる詩歌壇の痛心事なれば、この傾向を既
往の黄金時代に轉向せしめんとする第二の目的あり、さ
れば本叢書が他の詩歌集と自ら其の選を異にせるは自明
の理にして、定價の至廉、装幀の華麗、亦出版界の大驚
異たるべき事を信ず。

はしがき

無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のおとを追つて來たものは殆ど無かつた。こゝとさらに無形律を出さうとしても六ヶしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に擴張出來ると考へて、創作の方面ではとう／＼「詩界に別れる辭」まで書いて専ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕に取つては、この明治四十一、二、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀とのしやりかうべである。が、その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを讀んで呉れる讀者が少しでもあらば、僕の本望はこれに過ぎないのである。

大正四年二月

泡

鳴 識

目次

死、その他

死	(一)	胸のきしめき	二
	(二)	釘うつ響	五
	(三)	火葬	八
縁日			一〇
庭木の刈り込み			一五
ハンモク			二二
僕その物			二七
寒月			三三
二のしやらかうべ			三五
演説			四三

甲州の印象 四七
 樺太の雑感

(一) 汽車 七四
 (二) 乗り込み 七六
 (三) 鐘詰製造所 八二
 (四) 矛漁 八六
 (五) めの子 九〇
 (六) 焼損林 九四
 (七) 真赤な太陽 九七
 (八) ブシの花 九八
 (九) 何の爲めに僕 九九
 (一〇) マオカのゆふべ 一〇〇

札幌の印象 一〇一

『闇の盃盤』補遺

無言妖女 一二二
 土のほひ 一二四
 冬の夜 一二六
 家根の小露 一二八
 君とわれ 一二九

最近の作

カンナの赤い一輪 一二四
 浅草の女 一二七
 犬の聲 一三〇
 監獄の壁 一三五

死、外七篇

死

(一) 胸のきしめき

時計の ちくたくが 自分の 動悸と なつて 響いて
来た。

すると、今まで、どこだか 知れない

暗い 海の 真ん中で、大きな 輪がたに 漕ぎまはされ
て むた 身が、

身の舟 と 共に とまつて 明るい ところへ つれて
行かれる。

それは 広い 野邊だ——

夢に 花が 咲き、花に 夢の かをり、

かんばしい 風に 吹かれて 浮き世は 千里、

遠く ひろがる 眼路の 末に

ゆらぐは 木の葉。

その きらめく 蔭 から、誰れだか 知れない 人の

水汲む なつかしい 音が 聽える。

あんなに 楽しい 世 なら、

苦といふ ものは なかつた だらうに—— 今一度

あの 井戸に 行きたい、

あの水が 飲みたい、

あの水で 掬らへた 酒が 飲みたい。

ここへ 来たのは 間違ひで あつたらしい。
かう 思つたら また 急に 闇の崖がけ
うつら／＼の 胸むねさきに 迫つて 来て、
息が 詰つたのは 底も 知れない 虚空に 落ちて 行
くのだ。

『あー』と、思はず 聲を 擧げたら、
『あなた、あなた!』と 女房の 聲、
『しっかりなさい!』と 息子の 聲、
かしらに 娘、右には 隣りの 妻、
その他の 人々も ゐるらしい。

矢ッばし 井戸端の 室に 苦しんで ゐるのだ、

聲も 出ない この胸の きしめきしめ

畜生!

わが身の ことを 云つて ゐたのか、
今 聴えた 葬式準備の 話?

(二) 釘うつ響

けふに 限つて はツきり 聴える
隣りの 寺の 本堂新築の 音、
どこの 大工 だらう——吉公きちこうらしい、
かな 鋸を 使ふ 手が なかく 利いて ゐる。

あの お寺の 和尚も

年來の素志を爲就^{しと}げるのだ。
あたらしいのが出来て、
古いのが取りこわされたら、
こそ立派な見えになるだらう。

和尚の胸の様に おだやかな
池に——緋鯉は泳いでる だらう——その
新堂^{しんどう}が 映

6

つたら、
わが家の二階からも見える
この世の外の 蜃氣樓！
吉公、しツかり やつて 呉れ。

トン、トン、トン、トン、トトン！

トン、トン、トン、トン、トトン！
かな鈍の音——
どうして けふは 聲が 暗い？
どうして けふは 響き ばかりが 近いのだ？

わが耳に 釘うつ のでは なからうか、
この トン、トン、トトン？——
あ！ わが身は、もう、和尚 よりも 早く、
別な 新築に 這入つて ゐるのだ。

7

葬儀屋が 来て、
わが棺の 蓋に 釘うつ ひびき！

(三) 火 葬

燃えるわ、燃えるわ、
石油に 火を つけた 様だ！
ぼう／＼と 燃える 音は
どこからも 逃げる 道が ない。

このまま 立ちほだかつたら、
不動の 神力しんりき さながら だらうに——今、
狭く、固く かこんで、仰向けの
わが身を 焼く 火は——
音ある せい——風を つつむ 赤い 真綿まわただ。

別に 靈かいなる ものが あるなら、
見えぬ 文字もじの あぶり出し日記 も 出でように——
見えぬ 字も ない、感じも ない、
熱くも なければ、痛くも ない。

生きたいと もがけばこそ 熱い いのち——
ああ、今や、宇宙と われと が 全く
燃え盡さる 時が 来たのだ！

縁 日

二十日間は 日夜 父の 看護。

十日、十五日間は 父の なくなつた 跡の 始末、
僕は がっかり 勞れて しまつた。

墓と 死と 死の國と に

餘り あたまを つつ込んで ゐた から、
陰府よみの 臭ひと 勞れど が 一緒に なつて、
鼻さきに ちらつくのは うす暗い 神経だ。

僕 自身も 早や 一段 低い

夢の世に 落ちて 行く 氣が して、

手は 空しい 物を 握り、

足は 空しい 物を 踏む 様だ。

からだか 何となく 軽く なつて、たわいがない。

ふらりと そとへ 出ると、

お地藏さま の 縁日えんいちだ。

夜ぞらを 赤く 照らす 露店の ランプ、

いくつも いくつも かさなり合つて、

遠い様な、近い様な 光が

數多く 僕の 目に 映じて 来る。

僕は 足もとが あぶなく なつて、

その光 の 範圍へ 踏み入り かねた。

鳥渡 踏みとまつて、

からだの釣り合ひを取つて見た。
大道が 僕の足にこたへて 来た。
もう、大丈夫と、歩み出す。

あめ屋がある、きんつば屋がある。
おもちゃ店がある、古本店がある。
不斷は 氣にもとめなかつた物が、皆、
不思議に おもしろくツて たまらない——
丸で 新らしい 世界だ。

いそがしく 働く 目を 轉じて、

並んでゐる 植木屋の 前を 通ると、
父 在世の時は 縁日の ある 度毎に 出て来て、
ここいらで、好きな 植木を ひやかした の だらうと
思ひ出した。
然し、もう、その人 は ゐないのだ。

ぶんと 焼き鳥の にほひが して来た。
何だか 喰つて 見たく なつたので、
その店 の うしろへ まはつた。

暗い 陰 から

明るい 大道を 見てゐると、
ぞろぞろと おほ勢の 人が 通つて 行く。

その中に まじつて、圖抜けて 丈の 高い、
立派な 白髯の 老人の
いそいで 行くのが 見えた。

『おや、お父さん！』

僕は これを 口まで 出さない うちに、
僕の 回復 しかけた よろこびは
その人 の うしろ姿と 共に 消えて しまつた。

庭木の刈り込み

父の 代に 大事に された 庭木を
僕は 唐ばさみで 刈り込まうと した。

まだ 時期が 早いと 妻は 云つた。

然し、僕の 胸の 様に

鬱々 として 繁つて 来る 庭木を

そのままに して 置けば、

書齋は うちそと から 陰鬱な 壓迫だ。

うす暗い まはり椽 の 隅に しゃがんで、

うす暗い 心の 目を 放つと、——
時は 文月^{ふづき}だ、——
物憂い 梅雨^{つゆ}間の 晴れ日、——
梅の木 などの 青葉は、
重い 雨に 幾たびも 打たれた 爲めだ、
黒ずんで、
少しも 冴えた 光が ない。

目を つぶつて
考へて ゐる 様な その 枝葉の かげに、
父は 白い 口ひげ を ひねつて、
毎年、粒^{つぶ}立つ 木の實 を 仰ぎ見た のだ。

僕の 子供の 時も かれは さうで あつた、
近年も 亦 さうで あつたらう。
ところが、僕の 諸方を 放浪して ゐる うち、
いつのまにか 父は 亡くなつた。
否、亡くなつたの では ない、
僕の 記憶と なつて 抜け出た のだ。

最後の 二十日間、
朝に 晩に 看護して ゐた のは、
僕の 疲れた 神経の 一端に 觸れた
もぬけ の 土くれで あつたの だらう。
どうも、この 薄暗い 樹かげに、
かれは、見えないが、

まだ 立つてゐる 様な 氣が する。

それは 死の かけ かも 知れない。

と云ふのは、僕が 多年

生活に 疲れ、奔走に 疲れ、放浪に 疲れ、

生の 苦しみ——それが いのちで あつた——を 味

はつて 來た 今、

父の 建てた 家を 譲り受けた 氣持ちは、

一肩 おろせた だけに、

いよいよ 死に 近づいた 様で ある からだ。

庭の木 を 刈り込む 様な ことは

夢にも 見なかつた 初めての 經驗だ。

はしご を 梅の 幹みきに 立てかけて

なかば それに 攀ち登つた 時、

不馴れ の 爲めに

あたまが ふらふらして、目まひが したが、——

元來、僕は 机を 家と する 筆の人だ、——

こんな 植木屋 の 眞似を する 様になつた のは、

随分 氣の ゆるんで 來た 證據だ と おもつた。

實に 僕は 疲れた者、倦うんじた者、

刹那の 間でも ぐツすり 一安心 したい のは 山々

だが、

然し また 死人の 安住は 得たく ない。

睡ねむい 様で 覺めて ゐる 神經の 働さが、

地上を 離れては、一層
僕の 目前に ちらついて 見えた。

ふと、かな物の 臭ひが 動く、
新らしい 様な 而も 古くさい 様な 感じが、
黒ずんだ 青葉 から つたつて 来て、
僕の 使ふ はさみ の 音に 聴えた。

ちよきん、ちよきん！

また ちよきん、ちよきん！

何だか、僕が 自分の 身を 切り縮めて ゐる様だ。
そして、また、固い 枝を はさむ時、
顎を 明けて はさみ の 手ごたへ を 受け、

しツかりと 宙に 齒を かみ合はせた。
亡き父 が さういふ 時に いつも さう した のを
思ひ出し、
僕は ぞツと した。

死人が 僕の身に 乗りうつつて、
僕の身を 刈り込んで ゐたの では なからうか？

ハンモク

熱くて溜らない 日が
嚼んだ 氷の 様に 身に しみ込む 頃だ、
眞夏の 空に、
蟬の 聲が じいじい
僕の あたまを 煮えくり返す。

廊下の 柱と 柱とに ゆはへて
低く 釣した ハンモク の 中で、
僕は たわいもない からだを
たわいもなく 横たへた。

自分の からだ のか、何だか 分らない おもみが、
左右に 揺れて、
ありも しない 風を 待つて ゐる。
と 思つたら、突然、自分は 百萬年 以前
高い木 の 枝に 眠る 猿で あつたと 云ふ考へ が
浮んだ。

きのふ は 既に 前世界 だ――
ゆふべ、高い ところ から 落ちる 夢を 見たのは、
夢 では なく、實際、おほ昔、
生ひ繁つた 深林 の
枝から 枝へ 渡る 時に、
あやまつて

すべり落ちた 記憶で あらう。

今 落ちない のは 不思議だ と、
仰向いて 空を 見た。

浅い ひさし と それに かぶさつてゐる
庭の 松の木 との 間から、
熱した おほ空 の 廣がり が 追つて 来て、
僕の 呼吸が 苦しく なつた。

前世界 から 生活に 疲れて 来た 身體が、
ハンモク の 中で、揺られて ゐる 様だ、—
自分 の 身が おもた過ぎて、
何にも する 勇氣が ない。

このまま 死ねる なら 死んでも いいが、
さりとして、また、末練の ある この 人生。

いつまでも 眠つて ゐられる ものなら、
死んでしまふ のとは 違つて 安心 だらうが、
さうさう、永遠 まで

頼みの 綱は 朽ちないで ゐなからう。
と、どこからか 羽根が 生へた 様に、
僕の 考へは 百萬年 以前 から
百萬年 以後に 飛んだ。

くだらない 空想だ と 思つたが、
何だか、醒めて ゐて、おそはれる 氣持ちだ。

夏の 蒸し熱い 呼吸は、
乃ち、僕の 呼吸で あつた。

ああ、金が 欲しい！

僕を 解して 呉れる 女が 戀しい！

大事業を 爲たい！

いい 句を 得たい！

さまざまの 考へが 一時に 浮んで 来て、

蟬の聲 に 不安の 和聲を 添へた。

ハンモク は 實に 不安な 住ひだ、

ぶらぶら 動く たんびに、

僕の 胸は 息詰まる 思ひ！

僕その物

いろんな 思想が、

書齋の 空中 から、

鉛の 彈丸を 降らしたのだ。

それが 熱い 間は、

おほ粒の 露の 様に 融けて、

僕の からだに 氣持ちよく しみ込んだが、

冷めて 來たら、

あたま から 先づ 重くなり、

精神の 働きが 殆ど 全く 蔽塞する。

筆を 持つ 手が 働かなく なり、
からだ が 意久地なく 小さい 火鉢を いただく。
動うごきたくも ない、

横に なりたくも ない。
そして、障子を 以つて 囲まれた この 書齋、
『趣味』 やら 『早稻田文學』 やらが 散らばつてゐる
上を、

目の くもりと 共に、
薄ぐらい ゆふぐれが 押し寄せて 来る。

目の 前の 電燈を ひねると、
僕は 十六燭の 光に 堪へ切れない、

息詰る 様な 氣が して――
よくよく 疲勞 したのだ――
ふらりと 僕は 家を出る。

うすら寒い 道路を 電車に 乗つて、
運び切れない 重荷を 運ばせると、
自分で 自分の むごころが 分らない。
外套に くるまつたのは、
鉛の 冷つめたみ、
重い 足の 下から がうくと
車の きしめきが 傳はつて 来て、
抵抗力の 抜けた 全身を しびれさせる。

僕は留守であつたのか？
それともまた夢を見てゐたのか？
いつのまにか日比谷を過ぎて、
堀ばたを通つてゐる。

お堀の水が明るいので（五時過ぎだ）
ふと気がつく。

向ふの石垣の上の松の枝をよけて、
水色の空に

かかつてゐるのは三日月——誰れの姿であらう！

寒いのに顫へて
あくびをしたといふまたたき、

傾むいてちらくする光は、

（鉛のそれだが）

僕の經て來た疲勞の生涯を
そのままに活かしてゐる。

みづくした空を、

衰弱のしたたり——倦怠の光線——

夢中の輝き——うつつの力——

思想の彈雨はこれであつたらう！

書齋の空はここであつたらう！

寒さうな堀中の水面にも

あつたかい血は通つてゐるのか、

常若^{とこわか}の まなこが 開^あけて、
僕の むどころを 映^{うつ}した かと 思へば、
太い 電信柱^{はしち}に 遮^かぎられて、
その まぼろしは 消えた——
電車は がうくと 進行して ゐる。

然し 進行しないのは 僕だ、
水面の まぼろしを 追ひたい、
三日月の 光を 見て ゐたい、
そして 書齋と 思想とを あけては ゐない、
否、僕 その物は いつも 僕 その物だ。

寒 月

宮城の 黒い 森の 上に
圓い 月が 出てゐる、幽霊の 様だ。

熱^{あつ}もない 錫の かがやき——
焼き盡す 力の ない
地獄の 火に まどはれて、
僕の 靈が 浮び出たので あらうか？

青い 影！ つめたい あらはれ！
死の 光！ 無感覺の しるし！

僕には 殆ど 關係が ない。

然し 電車が 進行しても、
月は いつまでも 電車の 窓を 去らない。

見つめて みると、
その 疲れと 冷たさが 段々
僕の 身に しみ込んで 来て、
車臺の 隅に 小く なつてゐる 僕の からだが、
あたま から つま先き まで、
外套の 短かさを 感じて ゐた。

二のしやりかうべ

『お母さんー お母さんー』
と云つて、死んだ ものを 呼ぶのだ。
僕は ぎよツとして あたまを もたげた。

病人を 見ると、仰向いた まま、
久し振りの 優しい 微笑を 浮べて、
目 つぶつて ゐる。

しんとして、

鼠 一匹 騒がない 夜中、

臺ランプの光に
時計のちくたくばかりが明らかだ。

そのこまかい確かな刻み、
それが僕の脈博に傳はつて、

刻一刻、

快樂の夢は羽ばたきをして過ぎ行き、
心細い執着の緒綱が身を引き締める。

死にたくはない、

離れたくはない、

然しこの執着！この苦痛！

きのふは罪だ、良心が責める、
然しその良心も亦罪であらう——
男性にはまだしも堪へられようが、
この無邪氣な子をどうしよう？

どうせ死ぬものなら、
悔いなく恨みなく苦みなく殺したい。

しんとして、

外には何物が窺つてゐるか分らない。
『お母さん！』と、また輪廓のぼやけた一聲、
瘦せた顔に微笑がなほ更ら
いぢらしい。

夢を 見てゐる らしいので、
こころみに、
その あつたかい 胸 から
僕の 腕を やはらかに はづすと、
逃げる ものを 追ふ 様、
急に 空を 攫んだ。

『しーちゃん！ しーちゃん！』と、静かに 呼んで 見
たが、

覺めようとも しない。
僕も 考へた、呼び起して 苦痛に 返す よりも、
死ぬまで かうして めさせる 方が まだしも 功德だ。

早く 出来た 子なら、
僕には 總領娘 ぐらゐに 當る 若さだ、
無病 息災で あつた きのふは、
だだを 捏た ことも ある、
泣いて 無理を 云つた ことも 思ひ出される。

そして 今や、
ただ その 衰弱と 狂妄との 喰ひ物に
僕を 引きつけて 置くの かも 知れない。

過ぎ去つた 快樂は
現在の 僕を 満足させるに 足りない――
執着は もはや 愛で なく、

僕も亦自分の苦痛の餌ばを求めてゐたのか
も知れない。

ランプの光に 獣性じゆうせいの目覺め、

(それもやがて肉その物の腐爛に包まれて行く
くのだらう。)

僕の手足に女の存在を知らせるのは、

既に僕の病毒を多く運ぶ

その悪血あくけつのあつたかみばかりだ。

兄弟を棄てた女、
妻子を離れた男、

(ふたりの間はもとの他人だ。)

明き屋 同前の二階、

燃えるままの光、

(すすけた肉は腐つて行く。)

快樂のほとぼりがなくなるに從つて、どうせ死んでしまふ僕等、

苦痛の中の快樂も(なくなれば)一層強い死だ。

ただそれまでの連続——刹那すなはの衰頽——

時計の音の刻一刻は、

二つのしやりかうべを並べて刻むのだ。

抱き合つた 寢床の うち、
互ひの 口は
天井に 向つて 白い 息を 吐き出して ゐる！

演 説

演壇に 立つて コツプに 水をつぐ、
その 水の中を 凝視すると、
男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

恐怖と 意氣込みとは その水の あぢだ、
一くち 呑むと、
興奮した 神経が ひやりとして 静まる、
そして ビストルが 今にも 響いて 來さうだ。
その 水の中を 凝視すると、
男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

聴衆に 向つて 演説 するのか、
それとも また コツプに 向つて するのか、
いづれとも 判断が つかない。
(コツプには 大きな 耳が ついてゐる 様な 氣
がする。)

聴く ものには 聴えるのだ、
聴かない ものには 聴えないのだ、
いつのまにか オスカ ワイルドの 話が
僕 その物を 説いて ゐる。

場内じやうないは ひっそり して、

人々の 息の にはひが やはらかに
僕の 鼻さきを 夢の 様に なでるのだ。
ガラスに 映る だけの 世は 頼母しい、
(が、然し、そこに 破裂も あらう。)

毒か 薬か 分らない コツプの 水を 凝視すると、
男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

甲州の印象

甲州の印象

(一)

もう暮れて行く甲州の山々、富士のいただきが先づ隠れる、その手前の一列が隠れる、そのまた手前の列が隠れる、この數列の連山がみんな見えなくなつて、目前に田とつづく眞ッ黒な森もないほど、灰色の雨霽あまらやがかかつてしまつた。

鹽山えんざんは家のうしろで無論見える筈がないが、

左りは笹子峠の山脈も薄らいで、宿しゆくの裏庭に近い笹やぶばかりが黒い。

右の後ろ手からは、甲府の方に走る山がぼうツと

あたまが見えない大牛おまうしの脊の様に横たはつて、その脊の骨ぐみだけは薄くしめツぽい輪廓がついてゐる。

かう云ふ山々の間に見えたのは廣い野、青田あをた、遠い正面の山ふところからかけて、その麓ふもとまで、昨年しんねんの水害の跡、赤禿げの山腹、白びかりの砂道すなだち、今年ことしまたの溢水あふみ（夜あけ）ゆふ暮には銀河と見

えた、)

朝日 ゆふ日の それに きらめき映る 流れ。

涼しい 夏の 風に 浪打つ 四方 一面の 稻穂草、
人の 若い時を その 目ざましい 緑に 見せて、
おほ浪の 様に 揺れるのは 僕等の 心、
戀の 不安は この 廣い 青海あをうみに 浮んでゐる、
(但し、僕等の 不安に 底の ないのは、
實を 結ぶ 地の 底が 見えない のと 同じ様だ。)

この 海の 岸近くに——しイちやんも 覚えて ゐよう

——牛小屋、

稻の 葉浪に 見え隠れて、その 柵内で、

水に 浸ひたつて 喜ぶ 水牛すゐぎうか 何かの 様に、
親牛 小牛が 澤山 遊んで ゐて、
時々 もうく 鳴くのは、丁度 僕等が、
戀の 水ぞこに 息詰つて、懸命に
救ひの 空気を 呼ぶ 様だ、(しイちやん、
僕等にも かう云ふ ことが 度々 あるでは ないか?)

また 鐵道線路 に 桑畑——かう云ふ 現はれは す
べて

やみ夜と 瞑想と の 眼に 消えて 行つて、
動く ものは ただ 僕の 心 ばかり。

取り残された 旅は つらい ものだ、
しちやん まだが ゐなく なつたのは 丸で 闇。

その闇を 欄干に もたれて 見入つて ゐると、

末も 分らない 今も 分らない 一すじの 黒い 道を、

黒い 影、喪服を 着て 通る 影、

無言 (僕は 半ば つんぼに なつた) 沈黙 (僕は

物を 云ひたく ない)

悲痛、苦悶、死 などの 靈が うつ向いた まま

しくしく 泣いて 通つて 行く。

よくよく 寂しいと いふ ことを 覺えたの だらう、

誰れも 相手に する ものが ないのだ。

渠等も その 前世では 世の 人々の 爲めに 絶叫し、
その 意見も 吐露し、その 議論も 戦はした のだが、
相手が 分らないので 根氣負け をして 喪服を 着け
た。

それが また 一人 減り、二人 減り、三人、四人 減
り、

黒い 道の 黒い影は、草葉の 露が 朝日に 當つた様、
みんな 無くなつた。では、もとの 見えない 光か？さ
うではない。

死と 云ふ ものが 渠等を すべて 呑み下だし、
いち度 産れた 兒等を また 呑んでしまふ

鬼子母神の腹の様に、秘ひそんでゐた死の影が
段々大きく脹はれて来て、僕の闇に合した。

その闇がまた僕自身と合したので、

眞ッ暗な死は戀、しーちゃんの亡くなる時だと
思はれた。

(ことわつて置くが、しーちゃん、君の生きてゐる
間は僕も死なない。)

(三)

さういふ寂しい闇——霧が深い——の中から、
しめッぽいあかりが一つまたたいてゐる。
牛小屋に遠くないところだ。

そのあかりのまたたきには、しーちゃんがきのふ
汽車でステーションを立つた時の伏し目が思ひ
出される、

(しーちゃんは僕に別れる時目が潤んでゐたの
だ。)

別れはつらい、戀もつらい、そのつらさを知つて
ゐるのだらう。

あかりは今しよぼく泣いてゐる。——
女だ、男子は決して涙を見せない。

そのあかりが——居ゐ居りつてゐるのだが——動く様で、

ちらくしてゐる間に少し大きくなつた気がする、

闇の中にたつた一つの慰めだ。

恰も消えない露——日輪の光を晝間から一身に吸ひ込み、

目くらの夜を澤市の妻となる氣だらう、

(僕が若し全くつんぼになつたら、しーちゃんか僕の耳だ。)

その露ばかりの光を慰めの夜に、

小牛の聲が無言を破つて聽える、

何だか求める物があらかの様なうなり聲だ。

一度、二度、三度、四度、五度、

小牛が鳴くに つれてそれがしめつたランプの聲になつて、ヤッぱし同じ濕ッぽさだ。

ランプと聲、慰めと求めが一つになつたのだ、戀と不安が合體したのだ、

しーちゃん僕が同じおもひに浸されたのだ。

(四)

去年の水害に、鐵橋の破壊、

田地、道路、家屋、人畜の流出、

山麓のすべり出し、大岩石の移轉、

川流 沼澤の 滅却、奇變——

やま津浪の 猛烈な 勢ひに、

或 郵便局長は その 妻子の

氏名を 手足に 縫ひつける ひま さへ なかつた。

すべて こんな 物語りを 聞いた 日だ、

今まで 晴れてゐた 空が 午後 から 曇つて、

富士の 方面 から 段々の 大風雨、

雨は ちぎつて 投げる 様——おほ神鳴りも 聽える。

急しい 雨あしは 四方の 山々を 閉ざす、

宿の 女中共は まだ 時でもないのに 雨戸を 締める、

晝間を 殆ど 眞ッ暗な 闇、

之を 時々 破るのは おほ稻妻 の 屈折——

ぴかりー ぴかりー

また、ぴかりー ぴかりー

その 明滅の 間に しか

萬物と 僕等と の いのちは なかつたの だらう。

然し、戀の つづく 如く この あらしも つづいて、

ほんとの 夜に なつた 時は まこと 僕等の 世界だ、

あらしは ふたりの 枕もとに 響いて、

物凄い 奈落の眠り（これが 戀の 心だ）を 實現した。

宇宙 萬物を 無にした 妖女は しいちやんだ、

影も 形も ない 肉の あたたかみ、

之を 抱擁する 心には 底が ない。

(五)

汽車は もう 幾たびも 往復した、
再び 會ふ までは 僕は その 回數を かぞへて
る だらう。

往きにも 田の 間ちんだで 白い 煙りを 吐き、
復かりにも 亦 同じ ところで ぴいと 鳴る、
その 笛と 白けむとで いつも しちやんを 思ひ出す。

しちやん、君が 出發して から 急に 稻の 穂が
出でだした 様だ。
氣が つかかなかつた のだらう。——然し 汽車の 笛と

道とは 變らないが、
田を 渡る すず風は 四五日來 大分
ひやりして來て、ゆふべから 降りつづいた 秋さめに、
僕は もう 蚊屋を 奪はれ、室には 障子はまが 填はつた。

きのふ まで ふたりで 親しんで ゐた 室が
丸で 初對面の 様で、柱の 姿見に 映る 僕の 顔も
何だか 他人の 様に 瘦うせてゐる。——しちやんの
留守を、
戀の 寂しみと 一緒に 秋の 景色が 舞ひ込んで 來
たのだ。

ゆふべも さうで あつたが、今夜は 更らに 寂しい、

あすは 尙更ら だらうと 思つて 床に 就くと、
掛つてゐる ランプが 田の中の 一つ火の 様で、
僕の 心のおほ闇に 小さい あかりを 得た だぞ
却つて 求める ところが 多い。——小牛の 叫び
は 腹わたの 中から 聽える。

いつ又 しいちやんに 會はれよう？

もう、二三日、——

千萬年も 隔つて ゐる 様だ。

これが 戀の 時間と 里程 だか 知らん？

(六)

しいちやんは ゐる 間に 發熱して 三十九度 二分

の 熱、

それを 介抱して ゐる 時は 心配で あつたが、
然し また 忙しくツて、寂しさを おぼえなかつた。

僕は 獨りに なつて から、
直ぐ 下痢を して——氣候の 變り目だ——
けさ 膳に のぼつた 物が 全く 喰へないので、
今更らの 如く 秋の 寂しさを 覺え出した。

きのふは 蚊帳を 奪はれ、
けふは 障子が 填つた 室、
左右を 返り見ても ほかに 息する ものはない。

火を 吹き消した 闇の 寢床を 抜け出て、

僕の たましひは 軒下の 小流れに 浮び、

ちよろしく いふ 音と 共に、(僕は まだ 一方の

耳が 聴える)

田の 真ん中へ——曾て しちやんと 散歩した あた

り まで——

行つて 見たの だらう、ぼんやり 歸つて来て、

無言で 僕の 胸に 這入る 黒い 影が 見えた。

何物 だらう？ 僕は かう 質問した、(自分の たまし

ひを

忘れて ゐたのだ。) 然し その姿を 闇に 見失つたら、

急に 僕の 体内に 水音 の 様な 悲しみが 涌いて

来て、

胸の 裏がはに 苦痛を 産みつける ものが ある、

(しちやんに むしり取つて 貰ひたい。)

然し その物が 黒い 影だ、たましひだ、

生命だ、戀だ、しちやんの 置き土産だ、

それが また 僕の 詩歌だ——しちやん、

君が ゐないと 歌は いくらでも 出来ようが、

さて、僕は いつまでも 君と 離れて ゐたく ない。

(七)

驅けれ、驅けれ、汽車、

僕の むくろを 乗せて 驅けれ、

僕の戀と たましひ とを 乗せて
しーちやんの ところへだ、——しーちやん にだ！

僕は 今 理想家だ、

しやりかうべ の 様に 碎けて、その 手足 の 様に、
からだ と 心 とは 別々に 關節が はづれてゐる。
しーちやんの ゐない 甲州の 山野は、ああ、厭だ、
昔の 骨塚ツ原が 鳥邊野 だらう、
速かに 去れ、速かに 退け、この 荒涼たる 死國！

南に そびえて 無言、沈黙、

灰色の 空に 黒い 輪廓を 畫かく のは 何だ？

富士——これ やがて 僕等の 努力と 熱心 とを

無と 無自覺と に 葬つてしまふ 慕じるし、

萬人を 臨見 壓迫する 高津城、

残酷な 奥津城だ！

その他 大小の 山脈、連山も

狭苦しい 晝間の 光に 限られて、

小さい 宇宙の 棺に 死んでゐる、

活氣が ない、奮發が ない、無心無熱だ、

(僕は、しーちやん、日 よりも やみ夜が 生命だ。)

窓外に 開らけて ゐる 青田、桑田、
その間を くぐつて行く どぶの 様な 小川、
昨夜の 雨に 力を 得て

はち切れ さうな 粒^{つぶ}を 誇る 葡萄畑、
しーちゃんに よく 親しんだ 町の 子供、
しーちゃんの 廂髪を 笑つた 村の 百姓、
それらも 何だ？ すべて 死の 喰ひ物だ、
すべて 死の 硫黄じみた にはひが して 来る。

驅けれ、汽車、速かに しーちゃんに、

僕は 臨時の 理想家と なつて (僕の 心身^{しんく}の

關節は しやりかうべの 手足の 様に はづれてゐる、)

速かに この 死國の 山野を のがれたい のだ。

がッたん、がッたん、がッたん！

また がッたん、がッたん、がッたん！

その音が 急に 僕の 今 ぼんやりした 胸の やうに

眞ッ暗に なつて、

鳴り頻^{しき}る 神鳴りの 様な 響きが して来て、

(僕が いい方の 耳を 押さへれば、遠雷^{えんらい}の 音に 聴え
た、)

あせつて 夢中の 僕には、餘り 不思議だ、

汽車は 跡戻りを してゐる——

僕が しーちゃんを 追つて 逃げる のに 氣が付いて、

残酷な 死が

僕を 途中に 引きとめたの では ないか と思ふ と

たん、

ぴいと 汽笛が 鳴つて——トンネル を 一つ 出たの

だ——

また 別な トンネルに 這入つて 行く。

こつそり 忍んで しーちやんの ふところまで 行くの
だ と 思へば、

追ッかけて 来る ものが ある 様で、

甲州の 山野は 勿論、

中央線の トンネルだらけも 何だか 物凄い。

一緒に 来た 時は 夜で 氣が 付かなかつたが、

有名な 笹子トンネル に 死の 壓迫を 七八分――

それを 出てから、例の 流れ出た おほ岩 その 高さ

拾間 ほどのが、川でもない おほ川跡 の 真ん中に、

或 神社の 流れ出た のと もろとも、

ころがつて ゐるのが 見える――ヤッぱし、死の 遺物！

八王子へ 來てから 生き返つた 様な 氣がする――

死の おそれは なくなつて、僕の からだの 節々に

いのちの 氣が 循環して 來て、

理想家に 段々 生きた 肉の にほひ と あつたかみ

が してゐる。

戀よ、しーちやんに 近づいた のだ！

驅けれ、汽車、速かに、

僕の むくろと たましひ とを 乗せて 驅けれ、

冷たい 死と 孤獨と を 離れて、

あつたかい 死と 孤獨 との 東京に、

町と 人家、人と 友人に 満ちた 寂しみに、

苦悶 苦闘の生涯に、
肉といのちのかをりある 死に、
肉^{がふち}靈^{がふち}合^{がふち}致^{がふち}の 孤獨に、
ああ、しィちやんの ふどころに！

樺太の雜感

樺太の雜感

(一) 汽車

闇夜を横切つて

東北の廣野に出た汽車、

いつのまにか僕は

青い夜あけのけしきに目ざめてゐる。

光も青い、野も青い、

窓のがらすに垂れる夜露の名残りも青い。

自分の吐く息も青い様だ。

すると、僕には大きな青大將が

大地をのたくつて行くあり様が浮ぶ。

がッたん、がッたんの音が慣れツこになつて、

疲れた神経をますく鈍らしたのだらう、

餘り耳ざはりにはならず、

却つてそれが、土地と氣候の變化に添ふ

僕なる物の脈搏——身うちの脈搏——の

冷ツこいのたくりとしかおぼえられない。

僕はそのぬたくりで進んで来た、

闇夜と追想と多くの山河とを通り過ぎて来た。

そして、その疲労がさうした色と感じとに出

たのだらう。

トンネルを 這入つて また トンネルを 抜ける とた
ん、
ふと 室内を 見れば、
昨夜來 話し合つて 來た 婦人客が、
これも 亦 青い 顔を して、眠つて ゐる。

『もしく、あなたの 降りる 場所が 來ましたよ』と、
呼び起して やる さへ 不快な 程の 顔つき だが、
さて、その女が 身づくろひして 降りると なるに、
僕の 脈搏が それだけ 減する 様な 氣が した。

(二) 乗り込み

海上に 合唱の 聲が 聽える、

僕の 解はしけは それを 目がけて 進むのだ。

夜の 海上は うす氣味が 悪い、

自分は どこへ つれて 行かれるのか、

聲ばかりを 追ふて

海妖カササギの 國に 至る 様だ。

碇船はしせんの 帆船や、

大小の 汽船や の 間を 縫つて、

艦の 音が ぎう／＼と 進んで 行く。

どこまで それが 行くのか？

ただ 合唱の 聲が

赤い 舷燈の あがる ところ から 聽えるのが 分つ

て来た。

『高砂丸、お客さんだよ。』——『おう。』
そして、浪の光をたよりに僕は無言で
巖丈なタラブをのぼつて行き、
薄暗い客室に下だると、
急にむツとする臭ひだ。

そして、例の合唱は
自分の胸から響くのに思はれる。
初めはただわア〜云つてゐるのであつたが、
よく聴くと、
段々秩序がついて来る。

コラサアとも聴えるし、
ヤレコラサアとも云つてる様だし、
またドツコイシヨとも響く。

コラサアは一二名の聲だが、
ドツコイシヨは多くのものが出すらしい。
順序づけると、
コラサアと低く出て、
ヤレコラサアノであがり、
ドツコイシヨと非常な力が這入る。

それを繰り返して、
船底から荷物を出してゐるのだ。

コラサアで 引きすつて 来て、
ヤレコラサアノ、ドツコイシヨで 荷口へ あげる。
重い物は 急激に、
長い物には ゆっくりした 合唱だ。

ヤ、レ、コ、ラ、サアノ、ドツ、コイ、シヨノと
云ふ ゆつたりした 聲で
細長い 材木が 出るのを 見て ゐた時、ふと 氣が
附いたの だが、
荷口に また 一人 ゐて、
出た荷を 悠長に 敷へながら、
ヒト、フター、ミイ、ヨ、そのの 解に 渡して
ゐる。

そして、再び、コラサが 重さうに 出ると、
ヤレコラサアノ、ドツコイシヨ といふ 強力な 響に
ヒト、フター、ミイ といふ 悠長な 聲が 却つて
反對の 大調和を 保つのだ。

それが、聴き 且 見てゐる 僕の 心に、
そのまま しみ込んで、離れ難く なつて 来た頃、
合唱隊は 別々に 分れて
亡者の 如く ゐなく なつて しまつた。

急に 寂しく なつた 船室には、
僕 一人——乗り合ひ客は まだ 来ない。
小さい窓 からのぞくと、

小樽の街のあかりが心細く見えるばかりで、
樺太までの航海が
僕にはおぼつかない様な氣になつた。

そして、胸には、なほ、
ヤレコラサアの合唱が賑やかに響いてゐる。

(三) 罐詰製造所

広い板園ひの家だが、
ぴか／＼光る丸罐のつみ重ねを
除いては、
ほかに何にもないと云へよう。

がらん洞の家にがらん洞の丸罐が澤山積んで

あつて、

それに蓋づけるものもあれば、
指を脹らしてニスを塗つてゐるものもある。

そのそばの大きなゆで釜には、
百四五十度の熱湯が煮え滾つてゐて、
職人頭はそこから重い罐を一つ宛
取り出しては、おれの手加減を見ろと云はないば
かり、

うまくガス抜きをやる。

由さんが、鼻唄を歌ひながら、さきに立つて、
五尺六尺に餘る蟹を澤山運び込んで來ると、
『さア、事だ』と云ふ勢ひで、皆のものが

急がしい 手を 一層 急がしく 使ひ出す。

そして、由さんは、他の 人々が ふと ニス塗りの 手を 休めて、

煙草でも 吹かして ゐるのを 見ると、直ぐ

眞ッ赤になつて 自分の 女房に 當り、

『この 婆々アめ、何を うツかりして やアがる』とど 鳴りつける。

女房は それと 知らない から 反抗する、つかみ合ひ になる。

その 結果は、お互ひの ののしり合ひが やかましく なるが、

それだけ 却つて 仕事の 手は 進んで 行く。

罐の 蓋を つける もの、ニス塗る もの、

蟹の 皮を 剥くもの、身を 洗ふ もの、

罐を 煮る もの、あげる もの、――

急がしい 時は 二日でも、三日でも、

徹夜を して 碌々 眠る ひまも ない。

風呂の 立たない 海岸の 村で ある から、皆

練釜に 湯を 沸かして 這入るの だが、

一週に 一回ぐらゐ では、からだの 蟹くさいのが 落ちる 時がない。

皆が皆、湯を 沸かさないうで、しらみを 湧かして ゐる。

然し、それが

人の支配の報酬を もたらすの だから面白い。

或夜 一度、僕は 自分の 製造所に とまつて 見たが、

氣味の 悪いと 思ふ しらみが

夢に 僕の 頸すぢへ のぼつて 來たので、

それを ふり拂ふと、

小指 ほどち あつたかと 惜まれた。

(四) 矛 漁

ゆたかに 流れる エストル川、

その 中流に 浮ぶ 丸木舟 の

真ん中に 一人の 老人——目が 窪んで、

濃い 眉は 迫り、

頬髯、口髯 の 長いの——が 立つて、

椴松の 皓々たる かがり火を 高く かけて みると、

舳舻に おの—— 一名の アイノが、

鉤つき矛を さかしまに かまへて、

一心不亂、

水中を 見つめて ゐる。

やみ夜だが、

澄み切つた 水の中には、

周囲の 森林と 共に、

火に 映じた 紅魚が 三つ、四つ、

反れ矢の 如く ひらめいて ゐるのを、

舳さきの アイノが 刺し損ふと、

鱧^{まき}べの アイノが つき刺す。
ともべの アイノが つき損じると。
へさきの アイノが ぐざと 貫く。

その 早わざが 紅魚の ひらのき よりも 勝^{まさ}つて 來
たのを 見て、

髯の 老人は うちほほゑみ、

先づ『それで よし』と 聲を かけた。

すると、二名の アイノは ほつと 一息 して、

おそろく 額の 汗を ふいた。

二名とも まだ 無^む言^{ごん}だ。

老人の 黙令に 従ひ、

舟を 草深い 岸に つけると、
渠^かは ひらり 飛び下りて、

まだ 櫂を 握つてゐる 二名に 向つて 云ふ様、

『われは トンチ 最後の 末、

今、なんぢ等に 名残り として

矛^{ほこ}漁^{りう}の 秘術を 授けた』と。

身を 轉じて、渠は

その脊 よりも 高い 露^{ふき}の葉、

ヤチ芭蕉の 葉かげに 消え失せて しまつた。

そして、この 紅魚捕獲の 秘術が アイノ人の 間に
傳はつた ので ある。

(五) めの子

ああ、アイノ娘、ちひさい めの子よ。
かの 敗殘人種、劣等種族 の 間からも、
なんぢ の 様な 美人が 生れたのか？
おほ落、ヤチ芭蕉、とくさ、高よもぎ の 間から サク
の 花の 一と莖が つき出た 如く、
七月あやめ が 高原 一面に しめり氣ある 根を は
びこらして、
紫の 花の 咲き亂れた その間 から 黄色野百合 が
一もと 顔を あげた 如く、
なんぢは アイノ人の 間 から 生れたのか？

父は 幸ひにして 肺結核に 犯されて ゐなかつた の
だらう。

母は 不幸中 の 幸福にも 優等人種 の 梅毒を 受
けて ゐなかつたの だらう。

そして、なんぢは、幸中の 不幸にして、

狼の 如き 人種の 犠牲に なるのが 運命 だらう。

不思議な めの子よ、なんぢは

口端に 入れ墨も なく、髪も 結んで ゐるから、

鉢卷の ヘトマエを しないのを 誇りと するだらうが、

それが 却つて なんぢの 不幸を 來たす もとゐると

は 知つて ゐまい？

腰に つるした マキリの から鞆さげに

やがて なんぢは 身を 入れようと するだらう、
その 戀の 理想は シヤモ、日本人——
一に 番屋の 親かた、二に その 帳場、
三に 船頭、四は 人さきに 立つ 若いもの。
よしんば、それが 一時 叶つた とて、
永續する ものとは 思へまい？

下つて、兵士や 漁師に 移れば、

もう、それが 廢滅の 前兆だ。

『シヤモ 行く』時、

なんぢの 氣は 既に

おそるべき 病毒を 吸つて しまつたのだ。

そして、その毒は

なんぢの しなやかな からだを 腐融させ、

なんぢの 皮膚を 侵害し、

なんぢの 骨ぐみを うち崩し、

なんぢの 子を 結核、奇形、盲目にし、

なんぢの 子孫の 破滅を 速める ので ある。

ああ、劣等人種の めの子よ、

ああ、なんぢ、アイノ人 の 小娘！

なんぢは いつまでも 熊の 如く

人情を 解しないなら 幸福 だらうに！

手に 持つ 花、黄 並に 紫を 問はれて、

『ゆりに あやめ——』

佛さまに あげる ので あります』と 答ふ。

ゆりに 梅毒、あやめに 結核。
ああ、敗残劣等 の 家庭にも、
一時の 樂みは 宿るの だらうか？

(六) 燒損林

山火事の あつた 古い 跡だ、
さいはひにして、
風が 上向きに 吹いたの だらう、
榎松や 蝦夷松 の 上半は 焼け失せて、
下半は 幹 ばかりが すべて
白い しやりかうべの 様に つつ立つて ゐる。

その骨、その幹も 亦
長年の 風雨に さらされ、
手が 觸れば 直ぐ 崩れる 程に なつて ゐるから、
再び 火が 見舞ふと、
それらを 取り捲く 榛の木や 熊笹と 一緒に、
燃えるのは わけも ない。

樺太の 山火事は 人爲 ばかり でなく、 燐に よつて
獨り手に 發する ことが ある。
それが 數千町歩、數萬町歩を 焼き拂ふ には、
一冬を 越える のは 勿論
二冬、三冬に 渡つた 歴史も ある。
そして、その 勢ひが した這ひに なると、

地下 三尺も 四尺も 焼け込んで、
積雪の 壓迫を 事とも せず、
翌年 までも 越年しつつ 燃えるのだ。

燐を 多量に 含む 木炭質、

木の葉や 枯れ枝の 堆積に 過ぎない 太古の ままの

土、

而も、焼損林 中の 熊笹の 間だ――

石も ない、眞土も ない、

人の 通る 道も ない。

こんな 山なかの

ぼくぼくした 木炭土を 踏んで、

盛夏の 日光を 受けると 僕は、もう、

内地人の 知らない 火に 包まれてゐる 様だ。

(七) 眞赤な太陽

單調子な 樺太の 海岸に 獨り

立つて 考へて ゐると、

夕かたの 浪さへ 僕を 招いて 呉れない。

後ろの 草山には、無言で ガスが かつてしまふ。

目の前 には、静かな 海が 廣がつて、

矢ッ張り、ガスの 中に 隠れて 行く。

そこに、光線を 剥ぎ取られた 太陽が

眞ッ赤な 色を して、

浅い べに茶碗を 浮べて ゐる。

接吻！といふことが思ひ出されたが、
僕は愛する婦人に遠ざかつて来て、
その愛婦に棄てられた様に寂しくなつた。

(八) ブシの花

ブシの花は綺麗な蝶の如く
咲いた色が紫だが、
その根におそろべき毒を含む。
知らぬ人は折つて花瓶に挿すが、
知つたら、直ぐそれを棄てる。

僕に一人の愛がある。

毒婦の性根をあらはして、
僕の留守に僕を去つたと考へる。
然し、それが爲めに、僕は獨り
いよく、ますます身に泌む愛をおぼへる。

(九) 何の爲めに僕

何の爲めに、僕、
樺太へ来たのか分らない。
蟹の罐詰、何だそれが？
酒と女、これも何だ？

東京を去り、友輩に遠ざかり、
愛婦と離れ、文學的努力を忘れ、

握り得たのは、金でもない。

ただ、僕、自身の力、

これが、思ふ様に、動いてゐない。夕べには、

単調子な、樺太の海へ

僕の、身も、腹わたも、投げて、しまひたくなる。

(10) マオカのゆふべ

僕は、裕せに、裕せ羽織、

そして、出て来た。藝者は、單衣に、夏帯――

熱い様な、寒い様な、

分つてゐる様な、ゐない様な、

物足りない歌と三味と酒と洒落とに、

マオカのゆふべのお座敷は、暮れて、しまつた。

札幌の印象

札幌の印象

古い 京都の それよりは 一層 正しく、
東西南北に 確實な 井桁（市の動脈）を 打ら重ねた
北海の 首府——
石狩原野 の 大開墾地に 囲まれて、
六萬の 人口を 抱擁する 札幌の 市街——
住民は 凡て 必らずしも 活動して ゐるでは ないが、
多くは 自己 一代の 努力に 由つて その家を 建て
た ものだ。

然し 渠等の 目に 映ずるのは、ただ

焼け残つた 赤練瓦 の 道廳、
開拓紀念に 最も 好箇な 農科大學、
いつも 高い 煙突の 煙を 以つて 北地を 睥睨（ひげい）す
る 札幌ビール工場、製麻會社、
石造の 拓殖銀行、青白く 日光の 反射する 區立病院、
大通り 散策地の 諸銅像、北海タイムス、中島の 遊園、
北一條の 停車場、南一、二條の 繁榮、狸小路、遊廓、
（それらの 物には、すべて、内地から 入り込んだ 放浪
者 の
珍らしむ 價值は 殆ど なからうでは ないか？）

放浪者は 寧ろ その他に 注意する ものが ある、
積雪に 堪へる 様に 造つた 平家（ひらや）の 棟つづき、

停車場通りの アカシヤ街、

枝葉は 幹に 添つて 箒の 如く 空天に 逆立つ 白
楊樹 (内地で 云へば、いてふの 格)

開拓者が ところどころ 道に 切り残した アカダモ (ハ
ル榆) の 大木、

道ばたに 植る並べた イタヤもみぢ の 繁り。

これらが、——繁華な 町通りには ある わけで ない
が——影の 如く、

いつも 行く者の 心に つき添つて 離れない 脈搏
の 井桁、それを 縫つて、

田夫 または 田婦が、馬の脊に 乗せた 青物 (茄子、
胡瓜、西瓜、

キャベツ、玉ねぎ、西洋かぼちや、栗、くるみ、林檎、

唐もろこし、または、大根) を、呼び賣り して 賣はる
のだ。

(放浪者 には、その 百姓馬子 の 呼び賣りが 最も
意味深く

新開地 の 市街を 摘出する 様に 思はれた。)

渠、百姓馬子は 速かに 變遷する 季節を

この 静かな、蔭の多い、外國じみた 市街に 送り込む
神の 様だ。

渠の 荷に 胡瓜、甜瓜、茄子 の 多い ときは まだ
初めだが、

短かい 夏は やがて 栗、くるみ、ココアに 變じ、
おびただしい 唐もろこし や 林檎が 甚だ 少くなる

ど、直ぐ
漬け大根の洗はれたのが至るところの家根や
木々にかかる。

また別に、放浪者の目に付いたのは、町の角に
こん爐を持ち出し、
簡単に唐もろこしを焼いて賣るものが多かつた
ことだ。

その店の一つを僕は非常になつかしくおもつ
た――

と云ふのは、僕のふらり外出するたんびに目に
觸れるからで、
葉の大きなイタヤもみぢの太い根もとに、

晴天なら勿論、雨天でも、根氣よく、店を張つて
ゐるのだ。

暑いにも拘らず、こん爐の火がかんかんおこつ
てゐると、

その上にかけたもろこしの實はぶすくはじけ
つつ、

如何にもそのいいにはひがしてゐる限り、札
幌は、

僕の心に親しみがあつて、

きのふも、けふも、

放浪者の酒と女と（生の）價值もそこに見えると
思はれた）のあぢを途切らせなかつた。

或夜、（銅像も 見えない、白楊樹の 影も 見えない、
銀行、道廳、ビール會社、停車場 など。 見えない ほど、

雨あがりの ガス深い、しのッぽい 夜で あつた、） 僕
は 獨り、

ほろ酔ひ機嫌で、今 別れた 女の 追ひ分け節を 繰り
返しつつ

やつて 來ると、向ふに、一つ カンテラ の 光りらし
いのが 見える。

それが 例の 店で、（然し いつも とは 違つて、）
おやぢは 寒さうに 爐火に しがみついて ゐるから、

『おそくまで よく かせぐ、ね』と 初めて 聲を か
けて やると、

『へい』と 渠は 叮嚀に あたまを 下げたが、さも
馴れ馴れし さうに、

『いつも 上機嫌で、旦那は 御結構です。』

然し その おやちと 言葉を かはしたのは、あとにも
さきにも それツ切りで、

僕が 孤獨の 放浪に 耽醉して ゐる うちに 天長節
が 來た。

いつのまにか 渠の 店は 出なく なつて ゐるし、
市中を 歩きまはつても、青物を 積んだ 馬にも 出會
はなく なつた。

そして、變色に おそい イタヤもみぢ も 紅葉し、

大根は 既に 女郎屋の、ガラス戸で 圍んだ 長廊下に
多く 並んだ おほ樽に 漬けられたの を 見た時、
市街にも、遠い 山山と 同様、白い物が 積り出した。
そして、また 僕は、親しみの 深くなつた 札幌から、
舅の 好かない 婿養子の 如く 追ひ出されて しまつ
た――
樺太の 事業 どの 聯絡も 全く 絶えて――
金も 無く、寒さを よける 外套も 無く、――
東京 から 偶々 追ッかけて 来た 腐れ女 と 一緒
に！

闇の盃盤補遺

無言妖女

夢のあや絹、裾のさばき、

枕もとなる人のけはひ、

優いづにあたかきかをり——誰たぞや、

かろくわが身の胸にやさ手。

聲も顫えて、「君よ、曉あけの

鐘は鳴りぬ」と青きゑがほ。

ゆるむ節々答へ得えせず、

おもきかしらにまたもねむり。

あはれ、もも度、ももの戀の
甘あまき口づけ得えなば、ここに、
死をも招きて死にも受けん。

春のあかつき、床こゝろのぬくみ、

抜けてうれひに醒さめんよりも、

とはにいだかん無言妖女。

土のにほひ

君と 二たび、三たび、四たび、
むだの 口つけ、むだの 握手。
無言すがた は にほひ紅べにの
燃ゆる 火にこそ 溶けや しけめ、
黒き うらみよ、二つ胸に
リデル ゴノサン 物を 云ひぬ。

君し 今なほ 慣れぬ 出で湯、
同じ やまひの 脈をぬくめ、
あつき 湯けむの かげに 立ちて、

丈たけの 黒がみ 思ひ 長く
すずし 櫛巻き 巻きつ あらん。

戀や、くちばみ、朽ちて 夢に
土の にほひと そほち 行けど、
君と われとは またも 會はじ。

冬の夜

高臺たかだい 沈む

やみ夜のおほ空に、
いや遠長く

電車のひびき消ゆ。

今袖分けし

世としもおもほえず、

とこ世の無言

身にこそ泌しみみ渡れ。

まなこの酔ひは
人をし浮ぶれど、
冬の夜ふけて、
わが身はやみの底。

踏む霜ばしら

さくさく胸刻み、

冴え行く戀や

ほのほの道ひとつ。

家根の小露

濕りの山の

みどりををすくひ取り、

飛びかふつばめ

それをかふり撒ける。

葺き萱がや さらり。

家根にはむら螢――

晝なり、雨の

過ぎにし置き土産。

あたかも、倉の

小暗き板じきに、

散らけてまろぶ

珍めづらの古寶玉こほうぎよく。

白きは青く、

青きはまた赤あかに、

黒める家根を

しぼりて照り出づる。

その色強し、

電氣のかよひ踏ちや、

まばらに 光る
小露 は 燃えん とす。

ああ、その 小露、

燃え来て また 消ゆる。

短き 魂たまの

きはひ や、この 晴れ間。

君とわれ

若き 血 あらば 戀 を 戀ひよ、
そこに 不老 も 不死 も あらん。

花 の 乙女 は 老ゆる 早く、
春 は 白手しろて を 取れる ひま ぞ。

相も いだけば、夢 は 湧きて、
熱き いのち を かをる 樹かげ。

君 と われ とは うつら、うつら、

最近の作

とほのねむりに溶くる如し。
春のゆふべのいとも甘く、
君とわれとは溶くる如し。

カンナの赤い一輪

赤い 口びるの 接吻には、
百年も 千年も 問題では なかつた。
人生も 自然も 全く 融けてしまつて、
嗜欲の 焼ける 夢、
それが きのふ からの 現實で あつた。

だらりと 延べた からだ、
それに あり餘るのは
曾て 求め得よう とした 黄金の 光。
飽きに 飽きたのは、
既に 求め得た と思ふ 自己の 名譽。

そして、その光も 名譽も
亦 問題では なかつた。

おのれの そばに
おのれの 汗ばんだ 疲勞を 横たへた 影、
それを 見るだに、もう、
珍らしくも ない 夜の 勝利品！

一人しか 愛は ない——
その愛を さへ 返り見ないで、
僕は 僕と 共に 目が さめかけた
明け方の 蚊屋を 出て、
人工的な にほひと 色彩と の

ちらかつてる 小部屋の 雨戸を 一枚
物静かに くり明けた。

狭い 垣根の 中なかに、青々あをくと
露を 帯びた くさ木の あひだを、
ぱつと 燃える やうな カンナの 大輪たぐりんが 一つ、
寤ぼけた まなこに、
ゆふべ からの 情愛を 再現した。

『もう、澤山』と 思つたが、

涼しい 朝風に、
この 夜もすがら 置いてゐた 夜露を
初めて 胸 一杯に 吸ひ込んだ。

(大正元年八月稿)

浅草の女

敏としちやん、夜よるッて 暗いもの、
電氣が ある ぢやア ないの？

活動寫真 で 賑やかな 通り なんて、
晝間 よりやア あかるいで しよう。

田舎者 や 間拔あひだけづらの 間あひだを 縫ぬつて、
あなた と 手を 引いて 歩いてる と、

電氣 の 光で 太陽 よりも 陽氣に
あなた の お顔 ばかりが 輝くわ。

ゆふべ だツても、夜更けて から あなたと
あたしの 店さきで 羽根を ついて 見せた、わ、ね。

それに、あの 書生ツぼが また 生意氣にも 手紙を
よこし、

僕の 心は 夜 よりも 暗いツて、さ！

馬鹿、ね。人と 電氣の 都 だわ、—— 濞草の
公園 に のぼる 月 を 見ると、

月 さへも あかがね の 色に 鈍^鈍つて、とても、
あなたの 胸には 及びツこが ないわ、ね。

あたしの 太陽に 逢へない から あたし、晝間は
いつも 悲しくツて、暗いんだ もの！

人は 夜 だけ なら いいのに、ね、
電氣と あなたが あつて、陽氣で。

(大正四年一月二十五日稿)

犬の聲

わん／＼、わんと
うちの犬の聲が聴えてゐた——
その聲に僕は親しみを懐いて、今、
有樂町の事務所で仕事最中だった。

事務テブルの上には
深い靄がかかつて、濛々と
さへぎつてたのは僕の視線をだ。
その癖、太陽が
僕の頭上に輝いて、
僕の腹の中までが明るつた。

僕は 智策をめぐらして
事務上の命令をいくつも發し、
訪問客に對してはまた
それぞれ 適當な 應答を して、
新妻を 喜ばせる この 事業發展の
報告材料を 胸に 浮べた。

が、わん／＼、わんと
うちの犬の聲が聴えてゐた。
その聲のうへを濛々たる靄が
僕の視線はさへぎられてゐた。
立ち籠めて、

空想 ではないか、
晝の夢 ではと 僕は 疑つた、
太陽 の 方ほうが？ 然らざれば、かの
妻が 可愛がつてる 犬の 聲が？

わん／＼、わん の 深靄ふかもや——
そして、赫々たる 太陽！

僕は 不思議で たまらなかつたが、
その ゆふがた、社が 引けて から、
山の手線 を 目黒で 降りた 時、
そこの 一名物 たる
海と 山と の 混合靄こんがふもや が

可なり 深い 谷あひを 閉ぢ籠めて、
僕等の 家の 沈んでる
方向 さへも 分らなかつた。

その 底 から、
うちの 犬の 聲が 聴えた やうだ、
わん／＼、わん！——これだ、な と 思ひ、
僕は それに 引かれて 目黒坂 を
何 よりも 親しい 氣持ちで 下りて 行つた。

僕は、そして、妻と 犬と に 迎へられたが、
なほ 僕の 頭上づうじやう には
赫赫たる 太陽が 輝いて ゐた。

そして、うちの犬の聲が、
吠えても、ゐないのに、
わん／＼、わんと聽えてゐた。

(大正四年二月四日稿)

監獄の壁

朝から、僕は
監獄の壁を見てゐる。
夜になつても、亦、
監獄の赤い壁だ。

あまり廣がりの大きな壁を、
あまりに長い間のことで、
僕には、その壁が
巢鴨中に延び、
また東京中に渡つて、
赤いものであるかの印象を
與へた。

そして その 赤い 色は
僕の からだを めぐる 血、
それを 塗りこくつた やうに 思へる。

市中で 安直に 販賣する 道徳には、
高價な 血は 調合されて ないが、
巢鴨の 監獄に 閉ぢ込められた 不道徳には、
野心や 嫉妬や 窮迫 から 來た 眞珠の やうな
眞相が 輝く。

僕も その 壁に 向つて、
或時は 泥棒——或時は 人殺し——
また 或時は 強姦、詐欺、

偽造 等の 夢を 見て から、
巢鴨は 僕の 世界で あり。
監獄の 壁は 僕の 皮膚、
僕の 胸廓で ある ことが 分つた。

そして、朝 から 僕は
監獄の 壁を 見て ゐる。
夜に なつても、亦、
監獄の 赤い 壁だ。

(大正四年二月四日稿)

大正四年三月十日印刷
大正四年三月十五日發行

○(定價卅五錢)○

著者 岩野泡鳴

發行者 川上耕雨

東京市牛込區矢來町三番地

印刷者 篠田玉三

東京市神田區西小川町二丁目六番地

不許複製

發行所

東京市牛込區
矢來町三番地

合資會社

金風社

近代詩歌叢書

第一編

加藤介春氏著

詩集 自分を仰ぎて

新型美本
百卅三頁
定價卅五錢
郵送料四錢

その胸心を廣く持し、心性を自由に開きて自己と面々相接する生活に滲透或は吸引して生くる者の藝術には叩いて黄金の音あり、觸れて血の温みを感ずべし。之れ著者の生活態度にして、やがて藝術境の真相なり。著者今や「獄中哀歌」前後の作二百餘篇中より傑作五十餘篇を選出して本集をなす而も歌つて空想に入らず、咏みに夢裡を彷徨せず、飽くまで現實に終始透徹して眞率を極めたり。その哀切なる實感と、痛烈なる生活味とは、著者獨特の強盛なるリズムに塗りつぶされて、今や新詩の高潮を示せり。生き者の心性に觸れんとする者は、來つて本集を繙き心讀三昧すべし。

近代詩歌叢書

第二編

歌集 石ころ

士岐哀果氏著

新型美本
百五十頁
定價卅五錢
郵送料四錢

「予が歌は街上の石の如し。これをいとほしむ心
とにくむ心と相錯綜して、靴にて蹴りながらも潜
然として泣かまほしき気分にもなれば、又哄然と
笑殺せまほしき心ともなる。——小さな石ころ
大なる石ころ、噫一路はてなき我が地上生活の斷
片よ。」とは著者自らの言にして、その眞率痛烈な
る實感に、腸を斷つ思ひあり。泣かんとして泣き
得ず、笑はんとして笑ひ得ざる近代人の苦悶は之
れを著者の歌に見るべし。而も之れ著者が日常生
活の見聞所感、接觸の尊き經驗より得たる生産に
して、その高咏低唱には人間生活の悲喜兩面の生
相燦として鮮かなるものあり。

近代詩歌叢書

第三編

詩集 光る海

人見東明氏著

新型美本
百五十頁
定價卅五錢
郵送料四錢

昨冬「戀ころ」の大著を出して其の足跡を鮮かに
し、独自の世界を創造して注目の焦點を作れる著
者、今や第三詩集「光る海」を出版す。その詩の輝
きは太陽光の如く、その詩の深みはあだかも海底
の如く、沈潜して容易に窺知し難きものあり、而
も自己の生に滲透して飽かず、自己の生を慈育し
て止まざる著者は今や藝術眞境の高潮に達し、は
ちきれんとする生活慾を内面に感じつつあり。本
集はこの間に爛熟せる芳果なり。されば生命の實
相を味はんとする者は來りて本集を繙き煮沸せる
リズムに觸るべし。

近代詩歌叢書

第四編

若山牧水氏著

歌集 秋の落葉

新型美本
百五十頁
定價卅五錢
郵送料四錢

其の清くして澄めることあだかも秋天の如く、温
きこと春日の如きは之れ即ち著者の人格的精髓に
して、その心情に泌惨せる自然、風物、生相は直
ちに醸してリズムとなり、醱酵して歌となる。純
一不離、清冽豊潤は之れ著者が藝術真境なり、著
者今や「秋風の歌」以後の絶唱數百首を収めて本集
を出さんとする。わか芽の如く優しきリズムに、落
葉の悲しみあり。風の如く澄める節奏に、秋の寂
しさあり。さればこの一片をとりて心耳に聲を聞
かんとすれば、優しき涙頬をうるほし、あたゝか
き血潮の胸に湧きかへりわれと吾が心臓に觸るの
感ありを信ず。

4A BOOKSTORE